



◆パソコンや携帯電話を使っていますか？

最近発売された「ipad」が話題になっていますが、シニアにはその使い方や内容の違いがよく理解できない人も多いと思います。若い時にはなかった様々なコンピューター機器が、日常生活で使われるようになり、銀行のATMや券売機、交通用のICカードなど、どんどん新しいシステムが導入され本当に便利になりました。来年にはテレビもデジタル化され、さらにチャンネルが多様化しそうです。携帯電話やパソコンも今ではたくさんの種類が発売されて、高齢者もかなりの方が使うようになりました。

◆IT機器が低下した機能を支援

足腰が弱くなって、買い物や通院が困難になるのは、一人暮らし高齢者の一番の悩みです。とくに、地方の山間部や過疎地など交通手段の少ないところは深刻です。鳥取県日南町では、ケーブルテレビを使った買い物システムを立ち上げ軌道に乗せました。長年住み続けている地元の商店だから、一人ひとりの高齢者の生活をきめ細かく支援でき、また商店の活性化にもつながる効果があると期待が膨らんでいます。

また、タッチパネル式のテレビ電話を使った「地域の見守り」「ヘルスケア」「生活支援」を導入した島根県奥出雲町の例もあります。シニアに使いやすい機器を模索し実験した結果、操作しやすいテレビ電話になり、様々な工夫をしたといいます。使いこなせるまで民生委員や地元の有志が、熱心に指導して定着させたという苦労もあったようですが、このテレビ電話の効果で、「今まで感じていた不安や寂しさが和らいだ」とのアンケート結果が出ています。

このほかにも地域独自のインターネットによる、市民向けの生涯学習講座などを行っている地域もあります。高齢になってなお向学心の強い人たちに好評のようです。今後、このようなシステムが各地域に広がると、機能が低下した高齢者でも自宅で安心して暮らせるはずです。



◆一人暮らしを支える民間サービス

400万人を超える独居高齢者の安否を見守る民間サービスがいろいろ登場しています。ボタンひとつで24時間いつでも看護師と話せたり、相談に乗ってもらえる、緊急通報サービス大手の安全センター「お家でナースホーン」は、いざというときには救急車の手配もしてくれ、予防や予知にも力を入れているとのこと。

また、家電の利用状況や行動の様子をセンサーで探知して間接的に高齢者の様子を見守るサービスもあります。アートの「安否確認サービス」は冷蔵庫やトイレのドアに設置したセンサーで開閉状況を調べて高齢者が行動する様子を検知しています。象印マホービンの「みまもりほっとライン」や東京ガスの「みまもる」は電気ポットやガスの利用状況を1日1～2回メールで知らせる、より緩やかな見守りサービスを行っています。高齢者の異常を自動的に知らせる機能はありませんが、遠距離に住む家族には日常の安心を伝えることができます。

このほか、セコム「無線画像伝承システム」や立山システム研究所の「たてやまみまもりeye」なども新しい見守りサービスを展開中です。

◆ITを活用したシニア支援を広げよう

日々進化していくIT機器に戸惑い、使いこなせない高齢者に、もっと簡単で便利に利用できる機器の開発が望まれます。高齢者や家族、地域行政を結び付ける道具としてITを利用し、多くの関係者が一つの目的のために動く、社会システムの構築がこれからの課題といえます。使いやすいIT機器がシニアの強い味方になり、地域の有効なシニア支援が広がる日も近いことでしょう。(Y)